

さかなのまち「かどがわ」を未来につなぐために
— 門川の漁業を活性化させるための挑戦 —

門川漁業協同組合
中崎 瑛斗

1. 地域の概要

私の住む門川町は、県の北部に位置する人口約1万7,000人の小さな町で、門川沖に位置する枇榔島は、カンムリウミスズメの世界有数の繁殖地として知られている。また、古くから漁業・水産加工業が盛んで「さかなのまち」として知られており、門川三大祭りのひとつで豊漁と海の安全を祈願する尾末神社大祭も大きな賑わいをみせるなど、漁業と縁の深い町である。

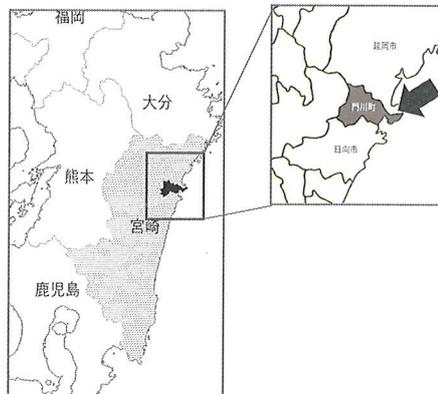


図1 門川町の位置

2. 漁業の概要

私が所属する門川漁業協同組合は、門川町に2つある漁協のひとつであり、77名の組合員（正組合員34名、准組合員43名）で構成されている。

令和5年の漁獲量は約179トン、漁獲金額は約1億5,200万円で、漁獲量の内訳は、32%が船曳網漁業、25%が近海延縄漁業、19%が底曳網漁業、12%が磯建網、8%が曳縄漁業、4%がその他となっている（図2）。また、漁獲金額は、35%が近海延縄漁業、29%が船曳網漁業、12%が磯建網漁業、9%が底曳網漁業、5%が曳縄漁業、11%がその他となっており（図3）、複数の漁業が行われ、そのほとんどが門川漁協地方卸売市場に水揚げされるため、地元には多様な魚種が流通している。

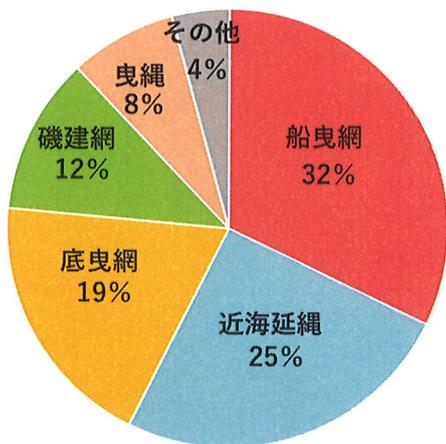


図2 漁業種類別漁獲量割合

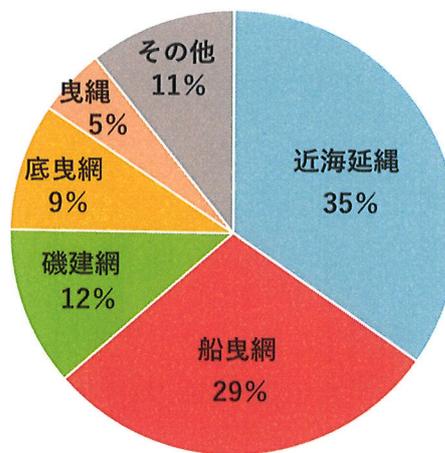


図3 漁業種類別漁獲金額割合

3. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

私は、門川町の出身で、中学校を卒業後、夢であった漁師になるため、県立高等水産研修所に入所した。修了後、県内のまぐろ延縄漁業、まき網漁業に従業員として従事していたが、漁業の経験を積む中で、地元の漁業に貢献したいという気持ちが次第に強くなった。

地元の門川漁協は組合員数が年々減少しており、平成15年に82人だった正組合員数が、令和5年には34人と、20年前に比べて約4割となっている。また、年齢構成をみると、50代以上が7割以上を占め、60代以上でみても、約6割を占めており、担い手の確保が急務となっている。

この現状を知り、さかなのまち門川の漁業が衰退してしまうと危機感を抱き、地元へ帰って就業し、門川の漁業を盛り上げるために尽力することを決めた。

従事する漁業を決める際に漁協に相談したところ、かつての基幹漁業であった小型底曳網漁業は、経営体が年々減少し、漁獲量も20年前に比べて約25%まで落ち込んでいる現状を知り、令和5年4月に組合員となり、小型底曳網漁業に就業することを決めた。門川漁協での小型底曳網の新規就業は、実に20年ぶりであった。

現在、私が新規就業のモデルになれるよう、魚価向上や地元での消費拡大に取り組んでいる。

4. 研究・実践活動の状況及び成果

小型底曳網漁業は、今までに経験していない漁業であったため、独立して就業するにあたり、操業に必要な技術・知識を習得する必要があるがあった。そこで、漁協に相談し、地元のベテラン漁師に指導してもらった。地元とは言え、独立して操業することには大きな不安があったが、漁協、先輩漁師の方々が手取り足取り指導してくれたため、大きな問題もなく、スムーズに就業することができた。

令和5年6月に初操業を迎え、初めての漁法に戸惑いながらも、先輩漁師から教えてもらったことを思い出しながら操業していたところ、船に不具合が発生したため、漁を中断して帰港した。ほろ苦いデビューではあったが、まずまずの漁獲があったため、初操業としては満足のいくものであった。その後、船の修繕に着手したが、不具合がなかなか解消せず、漁に出れないもどかしい日々を数日過ごすこととなった。初操業から約3週間後、ようやく漁を再開することができ、気持ちを切り替えて底曳網漁業に精進していた。しかし、不慣れな漁法ということもあってか、今度は網の破損が多発した。底曳網の網を修理することにも慣れていなかったため、作業に時間を要し、思うような操業をできない日々が続いた。また、就業から数か月間、水揚金額、漁獲量ともに伸び悩み、独立して漁業を営むことの厳しさ、難しさを痛感することとなり、網の修理作業等に時間を取られていたことや、結果がなかなか出なかったため、私は底曳網漁業には向いてないのではないかと自信をなくし、挫折しかけた時期もあった。

そんな時に支えてくれたのは、頼りになる先輩漁師であった。なかなか結果が出ずに悩んでいることを先輩漁師に打ち明けると、網修理や漁場探索、操業方法のコツやヒントを親身になって教えてくれた。また、自身の体験談なども踏まえながら励まし

の言葉をかけてくれたことは、私にとって大きな力となり、漁業に対するモチベーションを持ち直すきっかけとなった。

門川には、ライバルでありながらも、時には互いを支え合い、切磋琢磨することができる漁師仲間がたくさんいるため、門川町は私の自慢の漁師町である。

(小型底曳網漁業の収益向上)

先輩漁師にもらったヒントから自分なりに考え、自身の収益性向上を図るため、以下の2つの手法に取り組んだ。1つ目は、網を他船よりも重くしてより深い層を曳き、単価の高い魚種（ヒラメ、シタビラメ等）を漁獲できるよう工夫した。2つ目は、通常、1度の操業で約3時間30分の曳網を2回行うところを、私は、約2時間30分の曳網を3回行うようにしている。これにより、入網後の漁獲物へのダメージを軽減し、品質を高めるようにしている。漁獲物の処理等、先輩漁師にはまだまだ及ばない部分もあるものの、上記の取り組みにより、漁獲量、漁獲金額ともに、少しずつではあるが、増やすことができてきている（図4）。また、その日の海況や最近の漁模様をみながら、自分自身で考えて漁場や漁具を調整し、実際に操業してみて失敗することもあるが、狙ったとおりに漁があった時は非常に充実感があり、やりがいを感じられ、今では、門川に帰ってきて独立して良かったと思っている。

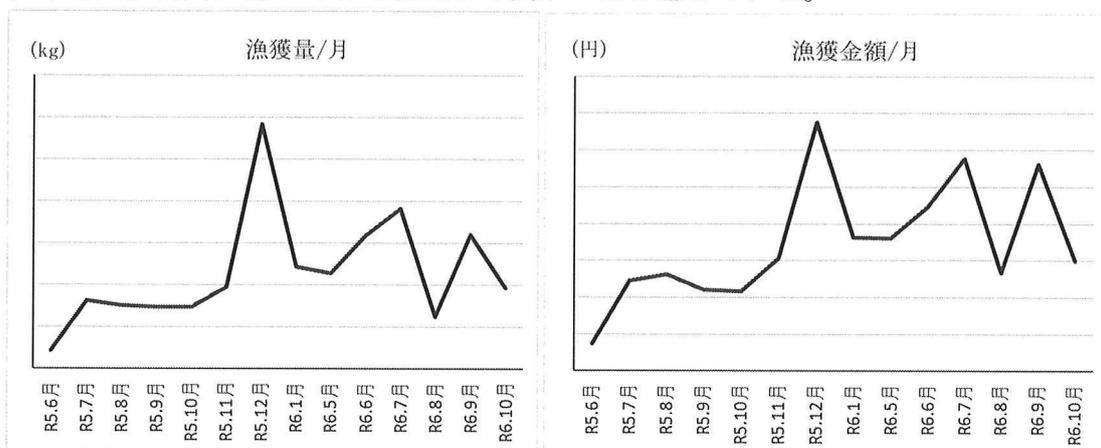


図4 漁獲量、漁獲金額の推移

(ハモラーメンの開発)

さらに収益性を向上させるための次の一手を考え、自身の主要な漁獲物であるハモに着目した。門川で漁獲されるハモは、これまでも主に県外向けに出荷されており、県内・地元での消費は非常に少ないのが現状である。そこで、金鱧の規格に満たないハモの県内・地元での需要を増やし、魚価の向上につなげるため、地元の名物になる商品を目指して商品開発に取り組んだ。商品開発にあたっては、私だけでは料理に関する技術・知識が乏しかったため、母に協力を仰いだ。どのような商品を作るか母と相談し



図5 ハモラーメン

ていた時に、福島県出身の母から、喜多方ラーメンをベースに、ハモの繊細な味を活かしてダシをとったラーメンはどうかと提案があった。宮崎県で育った私にはない発想であり、門川の名物商品になると思い、ハモラーメンの開発に着手した(図5)。

複数回の試食会を行い、味の改良を行いながら、令和5年12月に漁協前に店舗をオープンすることができた。ラーメンに使用するハモは、全て私が漁獲したハモであり、より鮮度の良いハモを提供できるよう、全て船上で血抜きし、鮮度を保つ工夫をしている。また、麺は、母のこだわりで喜多方の製麺所を訪ね、ハモラーメンに最も合う麺を選び、喜多方から仕入れている。店の運営は母が担っており、オープン当初は、月に20~30杯程度の売り上げであったが、今では月に100杯程度の売り上げがある。地元の方にも多く来店していただき、「今までに食べたことの上品なラーメンで美味しい。」「地元で門川のハモを食べられて嬉しい。」という声をいただいた。また、口コミが広がり、最近では、町外や県外のお客様も来店し、好評をいただいている。

上記の各取組については、自身のSNSでも発信し、門川の漁業の魅力を広く知ってもらうことで、担い手の確保や地域の活性化につなげたいと考えている。

5. 波及効果

私が就業して以降、若者を中心に新規就業希望者が門川漁協に集まり、現在、就業に向けて、4名(10代:1名、20代:2名、50代:1名)が漁業研修を受けている。うち10代の希望者は、私の取り組みを知って、自分もチャレンジしたいという気持ちが沸いたようで、小型底曳網漁業での独立経営を希望しており、私が指導者として、漁業の楽しさや厳しさも教えながら、研修を実施している。また、想定外の効果もあり、私が就業して以降、小型底曳網漁業の先輩漁師の方々の水揚げ日数が増えていた。話を聞いてみると、私のような若い漁師には負けていられないと、今まで以上に操業意欲が沸いたとの声が聞かれた。私は、新規就業の先駆けになればと取り組んできたが、先輩漁師の意識変化にもつながったことを知り、門川の漁業の活性化につながっていることをさらに実感できた。

また、テレビ局にも私の取組みに注目していただき、ドキュメンタリー番組やハモの紹介番組として放映されたことも、門川の漁業に注目してもらえるきっかけとなっ

た。

6. 今後の課題や計画と問題点

門川の漁業を活性化し、復活させるためには、担い手を継続的に確保していく必要があるため、引き続き、漁業の魅力のPRや就業希望者の研修指導、同業者のバックアップなどの就業後の定着につながる取り組みを実施していきたい。

また、就業後、私が壁にぶつかった時に先輩が大きな力になってくれたように、将来、新規就業者が困っているときに、今度は私が助けられる存在になれるよう、さらに精進したい。

ハモラーメンについても、来客数をさらに増やしたいと考えており、商品改良やPR活動による新規来店者の獲得、リピーターの確保にも積極的に取り組んでいきたい。

これらの取組を通して、門川の漁業を盛り上げ、漁業の活気に満ちたさかなのまち「かどがわ」を未来につないでいきたい。